

2021年5月16日～5月22日 各家庭でのディポーション用テキスト

[省みて]

神よ 苦きことありしを感謝しまつる
そはわれに恵みをもたらすもの
安易なる道よりわれを追いやりて
密室のあらしの中に投げ入れたり

神よ わが心の深き求めを
満たしえざりし友を感謝しまつる
そはわれを救い主の御足もとに追いやりて
なが御愛をば求むる心を起こさせたり

神よ さらに感謝しまつる
いのちの旅路を歩むとき
たれもわれを満たしえざりき
ただ神のうちにこそ
すべての富ありと知りえしがゆえに

フローレンス・ホワイト・ウィレット

■幻滅に対する訓練（1/3）

私たちは、この方こそイスラエルを贖ってくださるはずだ、と望みをかけていました。（ルカ 24:21）

幻滅というものは、いかに私たちの心の平静さや期待を粉々に砕いてしまうことであろう。私たちはだれでも、そのような苦い経験をしている。私たちの希望は、勇敢なカリオン船（訳注—15-19世紀にスペインでおもに軍船、あるいはアメリカとの貿易船として用いられた船。普通三層または四層の大形帆船）のように、遠く旅立って再び戻らず、たとい戻って来たとしても、打ち砕かれ、こわされてしまっている。私たちの夢は、天にまで届く威勢のよい積雲のようであったが、希薄な大気の中に消散してしまった。私たちは、自分の心の求めが必ず満たされると、反駁の余地なしに信じ切っていたのに、それとは全く反対に危機がもたらされ、混乱に直面することになってしまった。私たちも弟子たちのように、人生における期待を、日光の降り注ぐガリラヤ湖畔に打ち立てていたのである。そこでは群衆は歓呼し、食物が与えられた。ところがそこに、ゲッセマネの暗影が、ゴルゴタの悲しみが、そして園の沈黙した墓が訪れて来た。そこで私たちは、深刻な、陰気な、すべてを打ち砕く幻滅感にとらえられてしまう。

私たちは、自分の従順と犠牲の結果が幸福となるという、どのような保証を持っていたらうか。その点について、弟子たちはどのような保証を持っていたらうか。彼らは、言いようのないやさしさをもって自分たちを召してくださった方、他のだれにもない権威を持ちながら、しかも穏やかに語られた方、飢えた者に食物を与え、波を静められた方、神の国とその原則を告げられた方、すべての必要を満たしてくださった方に従うために、魚をとる網や税金を数える机を捨て、父母を捨て、家族や財産を捨てたのである。明らかに彼らは、この方がメシヤであり、神に油注がれた方であることを確信していた。彼らは心からそう信じ、彼らの生活はこの方を中心として打ち立てられていた。ところが、その方は今は死に、冷たくなって墓に葬られ、もう三日にもなるのだ。メシヤであるはずの方が死んでしまった。彼らが幻滅のどん底に突き落とされたのも、無理もない。

しかし、私たちの場合をふり返ってみると、やはり他の人々に幻滅を感じたり、時には救い主に対してさえそのような感情を抱いたりしているのではないだろうか。私たちが主を自分のものとして受け入れ、自分のいのちの主としたときに、主は私たちを、罪の罰と罪の力から救い出す救い主となられた。主とともにガリラヤの経験をしていたころは、恵みと導き、いつくしみと栄光の奇蹟の連続であった。サマリヤでは他の人々に奉仕する喜びを味わい、カナではよき友を得、ベタニヤでは祝福を受け、宮では教えを受けた。しかしそこに、やはりゲッセマネのオリーブの木々の影が忍び寄り、カルバリの十字架が、そして墓が訪れて来た。主は私たちの期待を裏切り、私たちを永久にお捨てになったかのように思われた。私たちは心の中でひそかに、「私たちは、この方こそイスラエルを贖ってくださるはずだ、と望みをかけていました」と言った。

【V・レイモンド・エドマン 人生の訓練 第二十五章「幻滅に対する訓練」より】

※この本は図書に置かれています。さらに読みたい方はどうぞご利用下さい。